

前頭葉側頭葉型認知症による無気力に対する新しい治療

御利用者様および御家族様には、日頃大変お世話になっております。

今回の話題は、前頭葉側頭葉型認知症という比較的珍しい形の認知症に対する治療の試みです。オキシトシンという脳から出てくるホルモンを点鼻薬で使用しています。根本治療ではなく、症状のひとつ(無気力)に対する治療です。「ランセット」という英国で一番有名な雑誌に投稿されていました。まだ治験の第 2 相という段階で、薬剤効果の判定ではなく、主に安全性を確認する研究です。薬剤として認められるには、これから第 3 相という治験を行わなくてはなりません。今回、この論文を取り上げた理由は 3 つあります。一つは「点鼻薬」はあまりおなじみがないかと思ったこと。二つ目は、新しい薬剤ではなく、すでに広く使用されている薬剤による治療であること。三つ目は、無気力に関して。

まず「点鼻薬」ですが、鼻血が止まりにくかったことを御経験の方は多いかと思います。鼻の奥は血管が豊富です。このため、鼻粘膜から吸収された薬物は、飲み薬より確実に素早く血中に入ります。飲み薬では吸収が悪い薬や肝臓で壊されてしまう薬でも有効な血中濃度を得やすくなります。効果発現が早くなります。薬物によっては鼻粘膜から脳に直接移行できる可能性があります。最近、脳に作用する薬剤の研究では「点鼻薬」が多くなっています。

次に、オキシトシンに関して。脳の視床下部というところにある神経分泌細胞で合成され、下垂体後葉から分泌されるホルモンです。脳から分泌されるホルモンですから、なんだか脳の刺激になりそうですね。実際、今までもオキシトシンによる認知症治療研究は行われています。今回の研究は、このような治療研究を前進させたものです。でも実は、オキシトシンは薬剤としてずいぶん前から広く使用されています。陣痛促進薬です。子宮収縮を目的として分娩時に用いられています。調べてみたら 1954 年から発売されています。この小文をお読みいただいている方もお産の時に世話になったかもしれません。このような使い方を、ドラッグ リパーパシング(薬剤再利用とでも訳したらよいでしょうか)といいます。既知の薬効や副作用を利用し、別の疾患への使用を探っていきます。脳のホルモンなのに、陣痛促進剤として使用され、やっとなの治療に使われるかもしれないというのは面白い話ですね。

三つ目は無気力に関して。医学用語で「アパシー」といいますが、前頭前野の障害で起こるもので、意欲が低下して行動が起こせない状態です。御本人は自覚がないことが多く、気分が落ち込んでいるわけではありません。これと違って、うつ状態は気分が沈んでいる状態です。御本人は落ち込んでいることを自覚しているため、その状態に無力感を感じ、「いらだち」や「あせり」を覚えます。こちらのほうが大きな問題になる患者様もいらっしゃいます。うつ病やうつ状態には効果のある薬剤がいくつも開発されていますが、無気力(アパシー)は認知症そのものなので、あまり有効な治療はありません。

さて、論文の結論ですが、点鼻のオキシトシンは安全に使用できたとのことです。無気力に対して効果が見られました。今後は第 3 相(効果を判定する治験段階)に進行していくことになります。

今後とも 老健施設はみんぐ を宜しくお願い申し上げます。

2025 年 5 月 30 日 かめたに ひろし